

# 「非行少年等立ち直り支援チーム」の概要と活動状況

——関係機関と連携した京都府の少年非行防止対策——

中 川 多鶴子

京都府府民生活部青少年課長

## 1 京都府の少年非行の現状

京都府における少年非行の現状は、刑法犯で検挙された少年の数自体は減少傾向にあり、過去10年の推移を見ると、平成15年の3,210人から平成24年は1,680人と約48%減少しています。しかしながら、少年千人当たりの人口比では平成24年は11.8人で全国ワースト5位、再犯者率は42.2%で全国ワースト2位、それ以前の数年を遡っても人口比、再犯者率とも常に全国ワースト上位の水準にあり、深刻な状況が続いています。

## 2 非行問題を抱えた少年の立ち直り支援

こうした状況を踏まえ、関係機関が連携し一緒になって少年非行問題を考えようと、平成23年度に学識者を交えた関係機関からなる「少年非行問題対策会議」を設置し、非行の要因や効果的な対策について検討を重ね、その結果をアクションプランとしてとりまとめました。その中の取組みの一つが非行少年の立ち直り支援です。

平成24年4月、非行等の問題を抱える少年の立ち直りを支援するため、「家庭支援総合センター」内に「立ち直り支援チーム（愛称：ユース・アシスト）」を設置し、さらに平成25年4月には府内全域で支援を展開するため、中丹広域振興局福知山総合庁舎内に「北部サテライト」を開設しました。

ユース・アシストでは、学校や警察、児童相談所等の関係機関から支援要請を受けた少年を対象に、支援コーディネーターが継続的に関わりながら少年一人ひとりに適したプログラムを作成し体験活動等を通じて立ち直りを支援する「寄り添い型支援」と、家庭裁判所に送致され係属中で非行が比較的軽微な少年等を対象に、清掃等の社会貢献活動を行う「家庭裁判所係属中少年への支援」を実施しています。

### (1) 寄り添い型支援

「寄り添い型支援」では、関係機関とのケース会議等を通じて様々な情報を収集し、問題行動につながる主な原因や克服に向けた課題等を分析し、改善に向けた取組みと支援プログラムの作成を行います。プログラムの内容は、①支援コーディネーターによる継続的な面談、見守りを行う「基本プログラム」（少年との信頼関係構築、生活環境改善、支援効果の検証）の他、②介護や保育、農作業体験などを行う「体験活動プログラム」（自己を見つめ直す、将来の夢や目標・居場所の発見）、③学習支援や進路相談等を行う「就学支援プログラム」（少年の学力に応じた進学・復学等に向けた基礎学力の習得）、④仕事に就くための職業基礎能力の習得や就労体験などを行う「就労支援プログラム」（少年の希望や適性に応じた就労）、⑤保護者面談やカウンセリングなどを行う「家庭支援プログラム」（良好な家庭環境を整える）があり、個別のケースごとにこれらのプログラムを組み合わせる支援をしています。

支援の流れは、学校、警察、児童相談所などの関係機関が相談を受けたり関わりを持っている少年で、支援チームのしきみを活用することで効果が見込める場合にチームにつないでいただき、本人・保護者面談の後、紹介機関やその少年と

関わりのある関係機関が参加してケース会議を実施、各機関が持っている情報の共有や課題分析等を行う中でその少年に必要な支援プログラムを検討し、そのプログラムに基づき体験活動や学習支援などを様々な事業所や団体、ボランティアの協力を得て実施するというものです。

## (2) 家庭裁判所係属中少年への支援

また、「家庭裁判所係属中少年への支援」では、家庭裁判所に送致され係属中で、非行が比較的軽微又は試験観察中の少年を対象に、地域での清掃ボランティアなどの社会貢献活動に参加したり、地域住民との対話を実施しています。活動を通じてこれまでの自分を振り返り、地域のボランティアの方々とふれあったり一緒に活動する中で、感謝されたり人の役に立つ経験をし、達成感や自己肯定感、地域社会の一員としての自覚の芽生えなど、意識改善を図ることで再非行の防止につなげています。

## (3) 成果

これまでに支援した少年は、平成24年度中は「寄り添い型」が35名、「家庭裁判所係属中少年」が125名の計160名となっています。支援コーディネーターの継続的な関わりと学習支援や就労体験等により、非行が改善し復学や進学、就労などに結びついた事例や、清掃活動で地域の方々から「ありがとう。」「ご苦労様。」と声をかけられながら、一生懸命作業する姿が見られるなど、着実に成果が現れているところです。

# 3 子どもの起こす問題には訳がある

非行の背景や原因は様々です。(アクションプラン＜少年非行問題総合対策＞より)

- 地域の絆が薄れ子どもを社会全体で見守り育てる力が弱体化 → 非行抑止力の低下
- 罪悪感や犯罪であることの認識が希薄 → 規範意識の低下
- 基礎学力、コミュニケーション力の不足等による学校不適応
  - 居場所がない、疎外感・孤立感を抱く
- 発達上の課題がある子どもに対する周囲の理解不足、適切な支援の不足等
  - 適切な教育・療育環境の阻害による影響
- 放任や虐待等による家庭環境の悪化 → 健全な家庭生活の阻害による発育過程への影響
- 非行少年への指導・支援の継続性が担保されていない → 再犯者率の増加

子どもたちは自分が抱えている思いや痛みを言葉でうまく表現できません。決して最初から「非行少年」と呼ばれる子がいるのではなく、心が傷つき適切なケアをしてもらえなかった結果、「どうせ誰も分かってくれない」「何をしても無駄」「見捨てられた」という諦めや不信感、また苛立ちや怒り、悲しみや寂しさといった感情が非行や問題行動となって表れます。大人から見て「困った行動」というのは実は「困り」の表れなのです。

ユース・アシストでは、なぜそういう行動をとったのか、どこに原因があるのかを見極める、アセスメントをしっかりとすることを大切にしています。単に表出している行動だけを押さえても根本的な解決にはなりません。子どもたちの出すサインを見逃すことなく気持ちに寄り添いながら、その子にとって一番必要な支援は何かを考え、根気強く関わり続けているところです。

#### 4 おわりに

私たちは、家庭や学校に居場所を見いだせない、社会にうまく適応できない子どもたちの「心の居場所」でありたいと活動していますが、こうした気持ちを素直に出せたり存在を認められる、また助けを求めている「居場所」が身近な生活の場である地域の中にも広がっていくことが大切です。

立ち直り支援はすぐに効果が出るものではありませんが、今後とも関係機関と一層連携しながら、こうした地域での取り組みへの支援も含め、課題を抱える子どもたちが自立し、学校や社会で夢と希望を持って歩んでいけるよう取り組んでいきたいと考えています。